【博士論文題目】林羅山の学問形成とその特質――古典注釈書と編纂事業を中心に

武田祐樹

【論文要旨】

本論文は、林羅山（一五八三～一六五七）の学問の特質とその形成および発展の実態解明を目的とする。方法としては、林羅山が作成した古典注釈書と彼が主導した徳川幕府による修史事業に着目し、清原宣賢（一四七五～一五五〇）や藤原惺窩（一五六一～一六一九）および林鵞峯（一六一八～一六八〇）との比較検討を行うことにより、林羅山が先学の限界を如何に認識し、自身は如何に超克したのか、また林羅山自身の限界は何処にあり、それは如何に克服されたのかを、現存する林羅山資料の個別の性格に十分な配慮をしつつ、具体的な証拠に基づいて論じる。

如上の目的と方法を掲げる理由は以下の通り。第一の理由は、林羅山の学問が五山・博士家・藤原惺窩との交渉のなかで形成されたからである。林羅山は定められたカリキュラムに沿って、システマティックに学んだわけでは決してない。しかし、無軌道にも見える道程で林羅山は他者に学び、また他者との差異を明確にすることで自らの学問を形成して行く。したがって、林羅山の学問形成を解明するには、五山・博士家・藤原惺窩との比較検討が必須である。第二の理由は、林羅山の著述が徳川幕府の動向や彼自身の置かれた状況と密に関連するからである。林羅山が背負った仕事は徳川幕府の動向と密に関わっており、またその時々に林羅山が置かれた状況は一定ではない。したがって、現存する林羅山資料もまた多岐にわたり、またそれら資料が各々独自の性格を有し、決して一様でない。このために、それらを貫通する林羅山の学問も見出し難い。だからこそ、林羅山の学問を論じるためには、まず徳川幕府の動向や林羅山が置かれた状況との関連を念頭に置き、扱う資料固有の性格に十分配慮する必要がある。第三の理由は、林羅山の学問が林鵞峯によって継承されたからである。林羅山の学問は彼一人の人生では完結せず、林鵞峯による発展なくして完成しなかった。したがって、林羅山の何処に不足があり、林鵞峯はそれを如何に満たしたのかについて、比較検討を通じて明らかにする必要がある。

林羅山に関する先行研究は決して少なくない。むしろ、汗牛充棟の様相を呈する。しかしながら、その学問形成と発展に関する具体的な検討は甚だ不足している。また、その学問の特質についても長らく自明のものとして扱われ、ある前提や臆断のもとに議論されている。

かかる状況において、安井小太郎は林家の学風を古典と国史の研究と捉え、なおかつ林鵞峯をその学風を継承・発展させた人物として評価した。続いて、宇野茂彦が安井小太郎の見解を下敷きにして林羅山から林鵞峯への継承について触れると共に、林鵞峯の事業における『本朝通鑑』編纂の重要性を強調した。さらに、大島晃は林羅山の古典研究に着目し、その特質を資料の性格に配慮して具体的かつ詳細に論じた。

総じて、この三者の言は林羅山の学問の特質と発展に関わるものと言えよう。安井小太郎が枠組みを設定し、宇野茂彦が国史研究の側面から、大島晃が古典研究の側面から、各々林羅山の学問と林鵞峯への展開に言及した。他方、国語学の領域からは、博士家の訓点語と林羅山の訓点語を比較検討する、実証的な研究も現れている。目下、林羅山の学問形成に関する検討を行う土壌が整いつつある。

とはいえ、古典研究における五山や博士家あるいは藤原惺窩と林羅山の比較検討や、国史研究における林羅山と林鵞峯の比較検討は未だ十分とは言い難い。また、林羅山の古典研究に関しても、彼の資料が有する性格を念頭に置いた、さらなる議論の余地がある。

先行研究に不足している点は、林羅山の学問の歴史的位置づけと言える。本論文では、先行する学者の欠点と自身が優越する点について、林羅山が如何なる認識を持っていたのかを確認する。しかるのちに、林羅山と先行する学者の著述を比較検討することにより、両者の差異を明確にする。さらに、先に確認した林羅山自身の認識と照合することにより、林羅山の達成と限界を見極める。また、林羅山の後継者林鵞峯との比較検討を行うことで、林羅山の限界が如何に克服されたのかを窺う。

以上の作業を通じて、林羅山の学問が持つ特質を先学・後学との先後関係の中で把握したい。つまり、突然変異的に生まれた奇形や五山や博士家と代り映えのしない何物かとしてではなく、確かな連続性を備えながらも明らかに質を異にする、個性豊かな存在として林羅山の学問を捉え直すことを本論文の眼目としたい。

以下、論文の目次を掲げ、その後に各章について説明したい。

目次

序論
（1）　問題の所在
（2）　従来の日本漢学研究における林羅山
（3）　問題設定とアプローチ
（4）　本書の構成
前編　慶長から寛永前半にかけての林羅山と古典注釈
第一章　清原宣賢『三略秘抄』と林羅山『三略諺解』の比較検討
はじめに
第一節　『論語諺解』における清原家批判
第二節　『三略』を対象とする理由
第三節　清原家の抄物
第四節　林羅山の諺解
小結
第二章　『七書直解』のテキストに対する姿勢の比較
はじめに

第一節　成化二二年版と嘉靖一六年版のテキストに問題がある例
第二節　清原宣賢がテキストを改定している例
第三節　林羅山のテキストに対する姿勢
小結
第三章　林羅山の『大学』解釈をめぐって
はじめに
第一節　『大學諺解』と『大學和字抄』
第二節　伝と章句の掲出法
第三節　明代諸書をも含めた新注に拠る解釈
第四節　古注の検討
第五節　解説の繁簡
第六節　人倫を説く
小結
第四章　藤原惺窩と林羅山の交渉再考―『知新日録』受容を考慮に入れて
はじめに
第一節　林羅山の藤原惺窩との交渉と『知新日録』受容
第二節　林羅山が慶長九年三月朔日付書簡に込めた意図について
第三節　藤原惺窩の慶長九年三月一二日付書簡について
第四節　林羅山の慶長九年三月一四日付書簡と同年四月中旬の書簡について
第五節　『大學諺解』における『知新日録』の利用状況と「致知在格物異説」の検討
第六節　「良知」・「誠意」の重視と「格物」の読み
第七節　林兆恩の「格物」説への批判
小結
後編　寛永末年からの林羅山と編纂事業
第五章　五山文学批判と博への志向
はじめに
第一節　長男林左門の死と碑銘に記された学習階梯
第二節　林鵞峯の学習階梯と五山文学の影響力
第三節　林讀耕齋の学習階梯
第四節　林左門の学習階梯
小結
第六章　林羅山の学問とその特質について
はじめに
第一節　獲得した知識の運用方法
第二節　林羅山が子に与えた対策
第三節　寛永一〇年代後半からの徳川幕府による編纂事業と林家親子

第四節　経書の記述とその齟齬の縫合
第五節　六経の尊重
小結
第七章　『本朝神社考』上巻の構成について
はじめに
第一節　『本朝神社考』のテキストについて
第二節　『本朝神社考』編纂の目的と方針
第三節　『本朝神社考』上巻の構成について
小結
第八章　徳川幕府の宗教政策と『本朝神社考』との連動について
はじめに
第一節　慶長年間から寛永年間にいたる徳川幕府の宗教政策
第二節　林羅山の神仏習合批判
第三節　林羅山の天皇批判
第四節　二二社に含まれない神社
小結
第九章　修史事業から窺う林羅山と林鵞峯の差異
はじめに
第一節　『本朝編年録』編纂の経緯
第二節　『本朝通鑑』編纂の経緯
第三節　『本朝編年録』および『本朝通鑑』草稿について
第四節　『本朝通鑑』編纂の方針と林鵞峯の認識
第五節　壬申の乱に関する記述から窺う林羅山の「勧懲の意」
第六節　治承・寿永の東西両朝に関する記述から窺う林鵞峯の「勧懲の意」
第七節　南北朝に関する記述から窺う林羅山と林鵞峯の差異
小結
結論
文献目録
図表
資料翻刻（島原図書館肥前島原松平文庫所蔵『大學和字抄』）

本論文は二編九章で構成し、前編では古典注釈書を、後編では史書を始めとする編纂物を主に扱った。また、前編と後編では取り扱う時期に差異を設けた。元号で言えば、前編は慶長から寛永の前半、後編は寛永の後半から寛文となる。もとより、林羅山の古典注釈書が前編で取り扱う時期にのみ成立したかと言えば、必ずしも当たらない。だが、対象とする時期や資料の種類を敢えて限定することで、より詳細かつ具体的な論述を試みたいか

らである。

まず第一章では、林羅山の学問形成と特質を論じた。具体的には、『大學諺解』と『論語諺解』で展開される清原家の四書学批判から林羅山の博士家の学に対する認識を窺い、しかるのちに『三略秘抄』と『三略諺解』の比較検討を行った。これにより、林羅山の清原家の学に対する認識と実際を照合すると共に、林羅山自身がそれを如何に乗り越えたのかを明らかにした。

続く第二章では、林羅山の学問が備える特質を前章とは異なる視点から論じた。具体的には、「林羅山年譜」の記述から林羅山のテキストクリティークに対する認識を窺うと共に、『三略秘抄』所引『三略直解』と林羅山旧蔵の写本のテキストを複数の明版や朝鮮本と対校した。これにより、林羅山の古書校訂に対する態度を清原宣賢のそれとの対比の下に明らかにした。

さらに第三章では、林羅山の注釈書間の比較検討を行うことで、林羅山の著述が有する多様な性格に配慮しつつ、その学問の特質を論じた。具体的には、ともに『大学』の注釈書である『大學諺解』と『大學和字抄』の形態や成立経緯などの差異を分析したのちに、比較検討を行った。これにより、個別の資料に存する性格上の差異にも関わらず、それらを貫通して確かに存在する林羅山の古典研究上の学問を浮かび上がらせた。

そして第四章では、林羅山の学問形成と特質について論じた。具体的には、陸九淵（一一三九～一一九三）・王守仁（一四七二～一五二九）・林兆恩（一五一七～一五九八）らの評価をめぐる林羅山と藤原惺窩の認識を確認したのちに、『大學諺解』と『大學要略』の比較検討を行った。これにより、林羅山の学問が成熟してゆく様を時間的に限定して叙述すると共に、その特質を藤原惺窩との対比の下に照出した。

後編冒頭の第五章では、林羅山の学問が持つ特質を論じた。具体的には、「林羅山年譜」の記事から林羅山自身の学問に関する認識を確認した。さらに、林羅山が子供たちへ課した読書の階梯を整理した。これにより、知識の獲得という観点から、林羅山の学問上の特質を解明した。

続く第六章においても、やはり林羅山による教育法の検討を通じて、その学問上の特質を論じた。具体的には、林羅山が青年時代に著した対策と、晩年に子供たちへ与えた対策を読解した。これにより、林羅山が博学を志向しつつも、やはりその学の本質が経学にあったことを明らかにした。前章と本章は、林羅山の学問が存する限界を論述の対象とし、以下の三章を含む後編の導入としての役割を負っている。

さらに第七章では、林羅山の学問が持つ特質を編纂事業という側面から論じた。具体的には、序の読解を通して『本朝神社考』の性格に関する林羅山の説明を確認したのちに、『本朝神社考』上巻の構成を検討した。これにより、『本朝神社考』という著述の性格を論じた。

また第八章では、前章に続き『本朝神社考』上巻の内容の検討を行った。これにより、『本朝神社考』の内容がそれと齟齬をきたしているか否かを点検した。これにより、林羅山の携わった編纂事業が徳川幕府の動向と密に関連することを明らかにした。

さらに第九章では、林羅山の学問が持つ限界を論じると共に、それを林鵞峯が克服し発展させたことを論じた。具体的には、『本朝編年録』編纂の経緯をたどった。さらに、その業を継いだ林鵞峯による『本朝通鑑』編纂の経緯を『国史館日録』から窺ったのちに、『本朝通鑑』の内容を検討した。これにより、林羅山の学問を林鵞峯が継承・発展させたことを明らかにした。

そして結論では、論述の整理をすると共に、林羅山の学問が有した可能性について簡潔に述べ、本論を結んだ。